

救いを完成させて下さる神

導入：

このピリピ人への手紙は獄中書簡と言われている中の一つで、パウロが伝道、開拓して(使徒の働き 16 章)誕生したピリピの教会に宛てて、おそらくローマの牢獄の中からパウロによって書かれた手紙です。この手紙は別名、喜びの書簡とも言われていて、喜びという言葉が全部で 16 回も出て来る。全体を読んでいくと、牢獄に捕らえられ、明日にも処刑されるかもしれない、そういう非常に厳しい状況に置かれている人間からの手紙とはとても思えないのですが、内側から喜びが湧き上がっている。手紙の文面を通してそういう喜びに溢れたパウロの姿を見ると、改めてああクリスチャンってそうなんだよなあ、たとえ今置かれている環境や状況がどうだったとしても、変わる事のない喜びが内にある、このイエス様が私の内に住んで下さっているって本当にすごいことだなあと思わされた。

まず、この手紙の全体を見ると、1 章では「私のいのちであるキリスト」、2 章では「私の模範であるキリスト」、3 章では「私の目標であるキリスト」、最後の 4 章では「私の動力であるキリスト」ということがテーマになっていますが、今日はこのピリピ人への手紙の 1 章の前半から、私のいのちであるキリストが私の内にあってどんなに素晴らしいことを成して下さるのかということを中心に留めながら、神様の語りかけに耳を傾けていきたいと思います。

本論：

(救いの御業とは?)

6 節に、「あなたがたのうちに良い働きを始められた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださる、、、」とありますが、この「良い働き」というのは、神様が私たちに成して下さる救いの御業のことです。聖霊なる神様は、まず私たちに罪を認めさせ、次にはその罪を告白させ、そしてイエス・キリストの十字架の死と復活が、「私のためである」と信じさせて下さるお方です。この良い働きを私たちの内に開始して下さったお方は、私たちの罪を赦し、義と認め、新しく生まれさせて下さる。そして、そればかりでなく古い私、生まれながらの私をキリストとともに十字架につけて殺して下さり、私たちの内に住んで下さるお方です。先程の賛美の歌詞にもありましたように、聖霊なる神様は私たちの内にあって、日々、私たちをきよめ、栄光から栄光へと主と同じかたちに造り変えていて下さるのです。そして神様は「キリスト・イエスの日が来るまでに救いの御業を完成させて下さる」というのです。完成というのは、完全に贖われるということですが、それは終わりの日に、新しい復活のからだ、朽ちることのない栄光のからだを与えられ、永遠に天に上げられることです。ですから、私たちの救いというのは、イエス様を信じて「救われた」ということで終わりなのではなく、イエス様を信じてスタートし、やがて完成させられる、現在はその途上、プロセスの中にある、「救われつつある」ということができる。

(救いは初めから終わりまで神様の御業である)

ここで大切なことは、救いは、徹頭徹尾、最初から最後まで神様の御業、聖霊様の働きであるということです。それは人間の努力や頑張りによってではないということです。ガラテヤ人への手紙をみると、律法の行いに捕らわれてしまっていたガラテヤのクリスチャンたちに対して、パウロが非常に激しい口調で、「ああ

愚かなガラテヤ人、、、あなたがたはどこまで道理がわからないのか。御霊で始まったあなたがたが、いま肉によって完成させられるというのか。・・・御霊に満たされ、導かれることを学びなさい。」と叱りつけていますが、私たちもまた、気がついたら律法や行いに捕らわれて、がんじがらめになっているということがあるかもしれません。イエス様を信じて罪から解放され、御霊による本当の自由を得たはずなのに、いつの間にか「クリスチャンなんだから、こうあらねばならない」とか「こうあるべきだ」というような思いに捕らわれてしまっている。勝手に自分で自分を縛りつけてしまっている。そういうことがある。聖霊なる神様が私たちのうちであって、私たちを造り変え、成長させようとして下さっているにもかかわらず、もし私たちが聖霊の働きに委ね、より頼むことなく、自分自身の知識や知恵、力、肉によって信仰生活を歩むならば、成長するチャンスを逃してしまっていると言える。神様は私たちが日々、聖霊により頼み、導かれることを通して成長することを願っておられます。

(神様は私たちの救いを必ず完成させて下さるお方である)

そしてもう一つのことは、神様は私たちの救いを必ず完成させて下さるということです。どうしてか？それは神様が始めて下さったからです。人間であれば、何かを始めても、途中でやめてしまったり、諦めたり、事情があつて中断せざるを得なかったりということで、完成に至ることができないということもあると思います。例えば、お友達に聞きたいのですが、ラジコンやプラモデルを作り始めたものの、完成させることができずに諦めてしまったということはありませんか？しかし、神様はそうではないんですね。神様が救いの御業を始めて下さった以上、たとえどんなことがあつても神様はそれを完成させて下さるのです。何にも妨げられることなく、神様は必ずそれを成し遂げて下さる。救いは神様の御業だからです。この変わることはない神様のご真実が私たちの信仰を支えているのです。私たちの頑張りとか行いとか、信仰深さとかではなく、ご自身が始められたこと、語られたことは必ず成し遂げられるこの神様のご真実が私たちの信仰を支えている。だから、私たちはどんな状況の中に置かれたとしても揺るがされることなく、堅く立って行くことができるのです。

(クリスチャンの成長とは、愛がますます豊かになることである。)

それでは、救いの完成に向けて神様は私たちをどのように造り変えて下さるのでしょうか？9-11 節にパウロの祈りがありますが、こう書かれています。パウロが熱愛し、心から慕っていたピリピのクリスチャンたちのために何を祈ったか、一つ目は、彼らの愛がますます豊かになるようにということでした。自分が誰かのためにとりなしの祈りをしようとする時、まず最初に何を祈るだろうか？と考えましたが、その人の愛が増し加わるようにと祈るだろうか？いやあ祈ってないかなあと思わされました。そして、パウロはただ単に「愛が豊かになるように」ではなく、「真の知識とあらゆる識別力によって、愛が豊かになるように」と祈っています。口語訳聖書では、「あなたがたの愛が、深い知識において、するどい感覚において、いよいよ増し加わり、、、」新共同訳聖書では、「・・・知る力と見抜く力を身につけて、あなたがたの愛がますます豊かになり、・・・」となっています。つまり、この愛とは、「聖霊によって光を受けた深い知識と、鋭い感覚、見抜く力を伴った愛」ということができると思います。ポーロ・リースという人は、この愛を「燃える心」と「光を受けた知性」が結合した愛だと言って、このように表現しています。「愛のない光には月夜に浮かぶ氷山のように近づきがたい冷たさがある。また反対に、光

のない愛には乾燥期の山火事のように燃え尽くすばかりの破壊力がある。」そして、そういう愛が豊かにされた結果どうなるか？10節に続きます。

本当に重要なことを見分けられるようになる、判別できるようになる。Goodでもなく、betterでもない、何がBestであるかを見極めることができるようになる。つまり、あらゆる場合に、神様の御心が何であるかをはっきりと知ることができるようになるということです。なんとすばらしいことかと思えます。私たちはともすると、成すべき良いことに終始するあまり、本当に重要なこと、最も成すべき最善のことが忘れられているということがないだろうと思わされる。しかし、聖霊によって私たちの内に愛が豊かにされていく時に、本当に重要なこと、最も労力や時間を注ぎ込むべきことが何であるかを判別することができるようになるということです。

(クリスチャンの成長とは、義の実に満たされている者となることである。)

そして、パウロの二つ目の祈りは、彼らがキリストの日には純真で非難されるところがなく、義の実に満たされている者となるようにということでした。ここでの義の実というのは、ガラテヤ人への手紙5章にある御霊の実のことです。どのような実かという、愛、喜び、平安(平和)、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制、そういうすばらしい実を豊かに結ぶ者とならせて下さる、自己啓発とか修行とか訓練では決して身に着けることのできないそういう品性を、まことのぶどうの木であるイエス様につながり、その愛の中にとどまり続ける時に、やがて時が来ると、豊かに身に着けさせて下さる、しかもそれらの実で満たして下さいということです。そしてそのことを通して、神様の栄光が現されるのです。

結論:

救いは初めから終わりまで神様の御業である。私たちの内に良い働き、すなわち救いの御業を始めて下さったお方は、その御業を終わりの時までには必ず完成させて下さる。(Ⅱコリント3:17,18)

どうか、私たち一人一人の愛が、深い知識と鋭い感覚において、ますます豊かにされますように。また、私たちがまことのぶどうの木であるイエス様につながることによって、御霊の実に満たされている者となり、神様のご栄光をあらわすことができますように。、、、

日々、主に自分自身の全てを委ね、ささげて、御霊に満たされることを祈り求め、御霊に導かれて歩ませていただきたい。